群馬県認知症ケア専門士会活動報告

＜吹割の滝＞

はじめに、私達群馬県認知症ケア専門士会は事務局を前橋に置き拠点として活動しています。

群馬県では、認知症ケアを志す認知症ケア専門士の有志が集まり、2006 年より任意団体を立ち上げ認知症ケアの向上を目的として活動してきました。その後,色々な経過をたどり、現在の「NPO 法人群馬県認知症ケア専門士会」（2015 年９月）とし、更なる向上を目指しています。

活動内容として、認知症ケア専門士がそれぞれの立場で、「認知症のその人」を理解し状態にあった、よりそうケアの提唱を推進できるようにしています。そのためには継続的な事例検討会や日曜会（勉強会）、幅広い知識を得るための講演会を主な活動しています。その他、各理事から会員の皆様にコラムや最新情報などを配信して連携を図っております。今年度からはホームページも立ち上げ情報に早期共有なども図っています。また、ケア専門士の資格取得の支援の勉強会も行っています。

≪講演会１≫　２８年１１月１３日　群馬県立県民健康科学大学大講義室

認知症の人は中核症状の進行により少しずつ日常生活で出来ないことが増えて行きます。ADL の視点でみると出来ないことになっても、もっと細やかにWHOが提唱した「ICF の視点」で「出来ること」「出来ないこと」を整理していくと「出来ない」と思われていたことが、実は出来ること（持っている力）があることが見えてきます。その視点の獲得、応用の在り方など「その人」にとって的確なケアを学びました。

１部：『なぜ、認知症高齢者を ICF の視点で捉えるのか』　**講師：渡邊　裕紀　先生**

東京大学医学部看護学科大学院卒後、認知症介護東京センターに勤務し主に、カリキュラム作り・講師などを中心的に行う。その後ＮＰＯ法人、紡屋本舗理事、目白大学講師を経て、現在東海大学社会福祉部講師である。

２部：事例検討会　『　Ａ様の盗食・暴力に悩む事から学ぶ　』　発表者　ナーシングホームあい暖　深澤明史　　アドバイザー、福島富和

A 様は他利用者の物を盗たり、手を挙げることを繰り返していた。BPSD と性格によるものと捉えたが、生活歴や現在の障害を整理すると、それらは介

護者が先入観で捉えたものであった。認知症だけでなくケアにおいて「利用者その人を知る」という原点に立ち返れました。

≪研修会１≫　　群馬県ホームヘルパー協議会研修支援

群馬県の４ヶ所において「訪問介護における他職種連携研修」が現在進行中です。“ホームヘルパーは基本的に在宅の高齢者に関わるケアに従事し、利用者の懐に飛び込むことから始めるケアとなり困難事例の宝庫です。そこで適切なケア方法、他機関、多職種との連携について多くの示唆に富んだ事例があるのです。その事例からの学びが基本になります。”研究協議”に参加した会員からはヘルパーのみなさまと共に事例に向き合い様々な視点で議論が行え、とても勉強になりました。正直、事例検討に挙げられていたアセスメントの細かさに驚きました。あそこまで詳細な情報収集が出来るのはやはり利用者様のご家庭に飛び込んでいるヘルパーさんの強みであり、「その人」をより深く理解できるのだとつくづく感じました。また、事例検討後の福島会長の解説でモヤモヤがスッキリする体験が、参加者全員の知的好奇心を刺激し、更なるモチベーションへ繋がってくれるだろうと感じました。まだまだ、知識も経験も未熟ですが、みなさまと共にもっともっと学んで行けたらと思います。（高橋）

≪研修会２≫　　小規模多機能施設へ認知症出張研修を３回に分けて行う：

その人の行動観察→掘り下げ→どんな人→望む暮らし→ケアの方向という過程の中で観察が自分の思いになっていたり、ざっくり過ぎる状況だったため、より深く見ることができるようアドバイスさせていただきました。また、いろいろな社会資源と良い意味で絡み合っていかないと小規模多機能の強みが発揮できないと感じているので課題山積の中、継続的なサポートが必要と感じました。（扇田）

≪　ホームページが完成しました。群馬県認知症ケア専門士会で検索ください。少しずつ充実させています≫